

六君子湯

「明」の時代に成立した「万病回春」の処方

<<効能>>

日本医師会医薬品カードより

構成生薬：蒼朮、人参、半夏、茯苓、大棗、陳皮、甘草、生姜

使用目標：本方は、主として慢性化した胃腸機能の低下症状に用いる処方である。本方を使う目標は心窩部の膨満感、食欲不振、全身の倦怠感などである。便通は便秘のことも、軟便のこともある。腹部は軟弱無力で、心窩部や臍の近傍に振水音を認めることが多い。

鑑別を要する処方：四君子湯、人参湯、茯苓飲、半夏瀉心湯

適応症：上記使用目標にしたがって、次の諸疾患に適用される。

胃炎、胃アトニー、胃下垂、慢性胃腸炎、胃潰瘍、慢性消耗性疾患あるいは術後の胃腸障害。

<<構成生薬>>

人参4g、白朮4g、大棗2g、甘草1g、茯苓4g、生姜0.5g、陳皮2g、半夏4g

人参：大補元氣、安神益智、健脾益氣、生津

白朮：補脾益氣、燥湿利水

大棗：補脾胃、養營安神、緩和薬性

甘草：補脾益氣、清熱解毒、潤肺止咳

茯苓：利水滲湿、健脾和中、寧心安神

生姜：発汗解表、温中止嘔、解毒

陳皮：理氣健脾、燥湿化痰

半夏：降逆止嘔、燥湿化痰、消ヒ散結

<<二味の薬徴>>

(生姜、大棗)：脾胃の機能を補養し、營衛を整える、

(生姜、半夏)：種々の原因で引き起こされた嘔吐、脾胃の機能不調でとどこおった湿、痰のよるひ満や咳嗽や多痰などの症状に用いる、

(茯苓、朮)：健脾利湿の効能が現れ、脾虚による運化機能の停滞、痰飲の停滞、ひ満による吐瀉及び脾虚の水腫に用いられる

(陳皮、生姜)：脾胃の機能を調べて、氣逆をおろし嘔吐を止める、

(陳皮、朮)：脾胃を補益して氣の働きを調える、

(陳皮、半夏)：胃氣不和によって生じる胃部脹満、悪心嘔吐に多く用いられ、また湿痰が滞って起さる痰の多い咳嗽、胸悶を治療する

(半夏、茯苓)：痰を除去して止嘔する、

(人参、朮)：健脾益氣の効能、脾胃の虚弱による食欲不振、胸悶して起さる腹脹、吐瀉、脱力感などの症状を治療する、

(人参、茯苓)：心脾の氣の不足、心臓動悸による氣短、食欲不振、脱力感などの症状を治療する、

(人参、甘草)：補氣生津、健脾養心作用があらわれるので、氣虚の脾弱による食欲不振、脱力感、泥状便などの症状に常用される

<<方意分解>>

四君子湯＋陳皮、半夏

二陳湯＋人参、白朮、大棗

四君子湯＋二陳湯

<<古典>>

「万病回春」類中風、嘔吐、補益、癰疽の項に掲載されている。

	六君子湯	四君子湯	異功散
	茯苓、人参、白朮、甘草、大棗、生姜、陳皮、半夏	茯苓、人参、白朮、甘草、大棗、生姜	茯苓、人参、白朮、甘草、大棗、生姜、陳皮
補益	脾胃虚弱、飲食思うこと少なく、或いは久しくギャク痢を患い、もしくは内熱を覚え、或は飲食化し難く、酸を作し、虚火に属するを治す	脾胃虚弱、飲食思うこと少なく、或は、大便実せず、身体瘦せ、面黄ばみ、或は胸膈虚ひし、痰飲、吞酸し、あるいは脾胃虚弱、このんでギャク痢を患う等の症を治す	
癰疽	脾胃虚弱、或は寒涼こくばつし、腫痛して消せず、或は潰斂せざるを治す	脾胃虚弱、或はこくばつによって腫痛散ぜず、潰斂すること能わざるを治す、およそ気血俱に虚するの症	
類中風	香附子、木香、縮砂、食けつは飲食を過し、胃の気自ら傷りて運化すること能わず。故に昏冒す	火に中る者は、河間がいわゆる肝木の風。内に中り六経の邪外を侵す。まことに五志過極、火盛んに水衰うるによる。熱気ふつうつし、昏冒して卒にたおる	
嘔吐	当帰、かっこう、縮砂、山薬、蓮肉、烏梅、しょう米 久病、胃虚し、嘔吐するを治す		
喘急		陳皮、厚朴、縮砂、蘇子、桑皮、当帰、沈香、木香	
眩暈		陳皮、半夏、当帰、川きゅう、白し、天麻、桔梗、黄耆	
諸気		当帰、厚朴、縮砂	
痘瘡			当帰、川きゅう、かし、半夏、大附子、厚朴、肉桂、小丁香
麻疹		○	

<<古典>>

六君子湯

「医方口訣集」(長沢道寿) 気虚して痰ある者、脾胃衰弱して湿有る者之を主る

「牛山方考」(香月牛山) 脾胃虚弱にして痰飲を挟む者を治す

「勿誤方函口訣」(浅田宗伯) この方は理中湯の変方にして、中気を扶け、胃を開くの効あり。故に老人脾胃虚弱にして痰あり、飲食を思わず、或いは大病後脾胃虚し、食味なき者に用ゆ。陳皮、半夏、胸中胃口の停飲を推し開くこと一層力ありて、四君子湯に比すれば最も活用有り。千金方半夏湯の類数方あれども、このほうの平穩なるにしかず。

「方意弁義」(岡本一抱) この方の名も四君子湯の方名と同じ、六味合して不偏不倚にして君子中和の徳の如しと称して名付くるなり。本方は、脾胃を補い、元気を養う。四君子湯の条下にもこの方にも共に元気を養うと云へり。その元気の虚と云へる、軽重を論ずれば、四君子湯の虚より重しとす。湿は虚の強きに従ひてあつまるが故なり。湿を去り、痰を退く。湿痰を退き去るべきために陳皮、半夏を組み入れたり。半夏は湿痰を除去といへど、陳皮を入れざれば、湿を除く功なし。たとえばしめりたる土地をば、鋤鍬を以てすきかえして、しめりの燥くが如く、陳皮の辛味を以て、ひらきめぐらし、苦き味を以ておし下す。甘草を多く入れて宜しとす。されども多きこと過ぐれば、却って胸に泥む事あり。炮姜にすれば甘き味まさり、性の温なるところいよいよ甚し。このほうに限らず、凡て補剤に入る生姜は炮して用いて宜し。

「当莊庵家方口解」(北尾春甫) 気虚して湿痰あるに用いると云うが目付也。尾張那須心庵は六君子湯に附子、肉桂、乾姜を加えて、健脾湯と名付けて常の虚人の主方にしたり。予は常に中風の養生薬に用ゆる也。ギャク後には湿痰ある故に必ず用いる也。虚人のギャクに炮姜二匁程入れて、発する日の朝用いて解することもあり。惣じて人參剤を用ゆるに、甘きを好む人には能く応ずる也。攻撃剤を用いて却って不食するに、六君子湯に炮姜を加え、甘き味を得て、食進むもある也。腹痛もこの心得にて用ゆる也。

「経験筆記」(津田玄仙) 六君子湯は皆知つての如く、甚だ使い道の多き方也。六君子湯は、四君子湯と二陳湯の合方にて、元気虚弱にして痰ある症に用いては正面の方也と知るべし。

「漢飲臆乗、脾胃門」(百々漢陰) 此方今世間にて云う六君子湯なり。出所さだかならず、姑く得効方に拠る。主治いろは分の方函の主治と、此れに録したる の主治と合せ用ゆべし。畢竟脾胃虚弱、水湿を帯びるものを治す。予の治験と云いて別に単方を用ゆること少なし。大病人の死の極まりたるものなど、真武、四逆の類を用いて、なるほど症はいかにも的当なれども病人の元気至って虚し、附子の薬力に堪えず、薬煩するもの世にまあるものなり。そのときにはこの方を与ふれば元気も引きたて、さらにまた薬煩もせず、至ってらくになるものなり。また一つには此の方に附子を加えて小児の慢驚風に用いて経験ありしなり。その他は主治を見計らいろいろ加味して治套して用いるなり。類に触れて推し広むべし。

「腹症奇覽」(稲葉文礼) 図のごとく、中カンより上、腹力ありて、下カン腹力なし、苓姜朮甘湯の腹症に似たり。臍下脱して力なく、小便不利、あるひは気急促迫、その人氣短く、あるひはことにふれておどろく、或いは歩行してよく倒る、尤も小児にこの証多し、世に癩症と号するもの、この証間あり、その余某々の病、その憂を問わず、この腹に合するもの六君子湯を用いて治せざるものなし。学者用いて以て効を知るべし。

<<附方>>

香砂六君子湯：六君子湯に香附子、縮砂、かっこうを加える。六君子湯の症に更に宿食、痰気を兼ねたものを治す。一般に慢性胃腸虚弱者は、宿食と痰気を兼ねており、香砂六君子湯の証を表わすものが多い。

柴芍六君子湯：六君子湯証のようであって、心下に拘攣、ひこうを証明する場合に用いる。

四君子湯

「方意弁義」（岡本一抱）脾胃を補い、元気を養う、凡そ気虚の主方なり。右の四味中焦を補って、不偏不倚の徳を得て、君子中和の徳ありという意を以て四君子湯と名づく。医林集要にはこの方を華だが製方なりとする。四君子湯、六君子湯の分ちは、理の上にて論ずれば四君子湯は脾の薬、六君子湯は胃の薬と定む。しかれども薬を用ゆるときはこの論にはかまはぬこと也。全体を論ずるときは、四君子湯の補は六君子湯の補よりはすぐれてつよし、
が医案に軽きときは益気湯、重きときは四君子湯と云へり。四君子湯はひたすら中焦にて補いたもつ功ありとみえてこの如く云へるなり。一切の気虚を補うには四君子湯を以て主方とす。凡そ気虚と云うには肺気の虚、肝気の虚、心気の虚と云う類ありて、気虚には段々差別あり、しかれども薬を用ゆる時は四君子湯を以て一切気虚の主方とす。一切の気虚は本脾胃の気虚より起こるによって、四君子湯を以て気虚の主方とするなり

「勿誤方函口訣」（浅田宗伯）このほうは気虚を主とす、故に一切の脾胃の元気虚して諸症を見ず者、このほうに加減斟酌して療すべし。気虚を益すといえども、参附と組み合わせ用いる証とは余程相違あり、唯胃口に飲を蓄える故、胃中の陽気分布し難く、飲食これによって進まず、胃口日々に塞がり、胸膈虚ヒ、痰嗽吞酸などを発するなり。此の方及び六君子湯皆飲食進み難く、気力薄きを以て主症とす。故に脈腹もまたコレに準じて力薄く、小柴胡、瀉心湯などの脈腹とは違いあるものなり。

「当莊庵家方口解」（北尾春甫）まず四君子湯の脈は、洪大にして無力、あるいは虚細微、あるいは弦緊これを案じて鼓せず、或いは数にして力なし。心下弱し。脾胃を補う薬、此外には無しと知るべし、外の薬方は多味なる故に功薄し。胃気を補う最上の方なり。すべて脾胃の陽気を補う故に食進み出て、力出来る也。

「蕉窓方意解」（和田東郭）この方脾胃虚弱、飲食進み難きを第一の標的として用ゆべし。かくのごとく脾胃虚弱とはいへども、参附を組み合わせ用ゆべき症とはよほど相違あり、唯胃口に飲を蓄ふるゆへ、胃中の陽気分布しがたく、飲食これによって進み難く、胃陽日々に布し難く、胃口日々に塞がり、胸膈虚ヒ、痰嗽吞酸などの証あるなり。（中略）中気薄き病症ゆへ、心下ひこうして任脈通り結びゆる腹候なれども、軽々に腹表を摩すれば、腹皮何となく力薄く、ブワブワとしたるよに覺ふ、この任脈および腹表の候ひに深く意を用いて錯認すべからず。

「名医方考」（呉 ）面色萎白、言語軽微、四肢無力、脈来ること虚弱なるもの此の方之を主る。それ面色萎白はすなわち之を望んで、しかして、その気虚なるを知り、言語軽微なるときはすなわち、之を切して、その気虚なるを知る。このごとくなるときはすなわち、宜しく気を補ふべし。

「療治茶談」（津田玄仙）四君子湯を用ゆるに大事の口訣一つあり、唇の色血色少なき時は四君子湯正面の証なりと知るべし。但し是は痔や下血の病人を見るとき口の訣なり。補中益気湯は手足倦怠の一つを目的にとり、四君子湯は面色の萎黄と唇の色の血色少なきとの二つを目的にとりて用ゆ。これ益気湯と四君子のわかれなり。名医方考にいわく、上下出血太多しければ、必ず四物湯を与ふることなかれ、と。四君子湯は春と夏とのごとし、四物湯は秋と冬とのごとし。天地の間にて万物を生ずるは春と夏なり。又万物を枯らすとは秋と冬なり。これ天地陰陽の常道なり。諸出血の証、唇の色を見て萎白ならば宜しく四君子湯を用ゆべし。

大塚敬節：便秘、食欲不振、めまいを訴える胃下垂症の患者。

28歳の婦人、一男一女がある。いままで著患を知らないが、平素から胃腸が弱い。最近、目立ってやせてきたので、医師にみてもらったところ、胃下垂症で、胃が骨盤まで下っているといわれた。そのためか、食欲が少なく、少し食べると、みずおちが重く、ときどきめまいがする。それに便秘するから4日に一回ぐらい浣腸をしているという。レ線による検診では、やせてはいるが、胸部には異常を発見しない。脈をみると、小弱で、臍上では振水音を証明する。私はこれに六君子湯を与え、甘味を好むので、それを制限するよう約束した。これを飲むと、毎日、気持ちの良い通事があり、食が進むようになり、1ヶ月ほどで4キロほど体重が増え、振水音もかすかに証明できる程度になった。そればかりか、風邪もひかなくなった。(漢方診療30年)

矢数道明：49歳の婦人であるが、2年前より胃下垂といわれ、いつも心窩部がひえ、全身倦怠感を訴え、肩や背が凝り、血圧は低く、ときどきめまいがして元気がない。この2年来皮膚に血豆がたくさん出てきた。便通は一回あるが、食欲がなく、子どもは一人で、帝王切開術をうけて生んだ。やせて貧血気味で、脈も腹も軟弱である。胃部拍水音が著名である。右季肋下部にやや緊張するところがあって、圧迫すると苦しいという。私はこれに柴芍六君子湯を与えた。これを服用していると、食欲が出て、冷えなくなり、冬になっても例年のように寒さを覚えず、コタツがいなくなった。そればかりでない。不思議なことには、全身とくに腹部皮膚に赤小豆のように多発していた血豆が消えてきた。新しいのができなくなったといって、大喜びであった。4カ月ほど飲んで廃棄した。(漢方処方解説)

花輪壽彦：33歳、女性。主訴は十二指腸潰瘍と背中のかりの治療。舌は薄い白苔、腹診では心下ひこう(+)、腹直筋攣急(+)、胃内停水(2+)、腹部動悸(+)、小腹不仁(+)。六君子湯にて十二指腸潰瘍の再発はなく、背中のかりも軽減した。現在は六君子湯合香蘇散料を内服中である。

漢方診療のレッスン357ページ、喘息患者。喘息発作の誘因に、1風邪をひくと発作に移行、2食べ過ぎたりしておなかの具合が悪いとき、3天候の変わり目にわるくなる、3低気圧が接近すると便意を催し軟便がでる、4発作の前におなか張ってくる、脈：沈、弱、舌：湿、白苔、腹：軽度の心窩ひこう、臍部動悸、六君子湯を処方し、2週間で胃腸の具合がよくなり、徐々に喘息発作の頻度、程度が軽くなっていった。

津田玄仙：△男子鼓腸を患う、面色萎黄、手足倦怠、咳嗽有りて痰ぜん出ること余程なり。脈も亦微弱なり。六君子湯に厚朴、枳実を加え、大半は快し、然れども十分の効なし。さらに乾姜を加え60服にして大いに快し、のち前方ばかりを用いること半年ばかりにして全快したり。面色萎黄、脈微弱、手足のだるきはこれ脾胃の虚なり。咳嗽痰ぜんは痰なり。故に六君子湯を用いたり。△一人胸つかえて力なく嘔吐あり、皆痰ぜんを吐く、少し手足倦怠の気味あり、百日ばかり服薬驗なし。治を予に求む。予脈をみるに浮きて眩数なるに似たれども推して力なき様なり。六君子湯に枳実を加え服薬30余日をへて全快す。これ手足の倦怠は脾胃の虚なり、四君子の症なり。胸、かたくつかえるは枳実の症なり。ときに嘔して痰を吐すは湿痰の逆なればこれ二陳湯の症なり。ゆえに六君子湯に枳実を加う。△一産婦子を持ちてのち、にわか悪心嘔吐し、いかようにしても治せず、予六君子湯に炮姜、木香、丁子を少し加えて与う。服薬1度にして嘔すくなくなり、一服をのみきらぬにさっぱりと治したり。これらは全く脾胃虚の痰嘔なり。

(経験筆記)

<<現代薬理、研究>>

1 消化器系の研究が多い。(別紙参照)

2 The effects of Rikkunshi-to on Parkinsonian patients with unstable effect of levodopa/carbidopa

Yutaka Hiyama et al. 和漢薬学会雑誌8、83-88、1991

3 六君子湯、補中益気湯の自律神経、下垂体-副腎機能に及ぼす影響に関する検討

岡 孝和ら、和漢薬学会誌8、360-361、1991

4 慢性腎炎にともなう口苦に対する六君子湯の有用性

元雄良治ら、漢方医学19巻の3、87-89、1995

六君子湯

「明」の時代に成立した「万病回春」の処方

<<効能>>

日本医師会医薬品カードより

構成生薬：蒼朮、人参、半夏、茯苓、大棗、陳皮、甘草、生姜

使用目標：本方は、主として慢性化した胃腸機能の低下症状に用いる処方である。本方を使う目標は心窩部の膨満感、食欲不振、全身の倦怠感などである。便通は便秘のことも、軟便のこともある。腹部は軟弱無力で、心窩部や臍の近傍に振水音を認めることが多い。

鑑別を要する処方：四君子湯、人参湯、茯苓飲、半夏瀉心湯

適応症：上記使用目標にしたがって、次の諸疾患に適用される。

胃炎、胃アトニー、胃下垂、慢性胃腸炎、胃潰瘍、慢性消耗性疾患あるいは術後の胃腸障害。

<<構成生薬>>

人参4g、白朮4g、大棗2g、甘草1g、茯苓4g、生姜0.5g、陳皮2g、半夏4g

人参：大補元氣、安神益智、健脾益氣、生津

白朮：補脾益氣、燥湿利水

大棗：補脾胃、養營安神、緩和薬性

甘草：補脾益氣、清熱解毒、潤肺止咳

茯苓：利水滲湿、健脾和中、寧心安神

生姜：発汗解表、温中止嘔、解毒

陳皮：理氣健脾、燥湿化痰

半夏：降逆止嘔、燥湿化痰、消ヒ散結

<<二味の薬徴>>

(生姜、大棗)：脾胃の機能を補養し、営衛を整える、

(生姜、半夏)：種々の原因で引き起こされた嘔吐、脾胃の機能不調でとどこおった湿、痰のよるひ満や咳嗽や多痰などの症状に用いる、

(茯苓、朮)：健脾利湿の効能が現れ、脾虚による運化機能の停滞、痰飲の停滞、ひ満による吐瀉及び脾虚の水腫に用いられる

(陳皮、生姜)：脾胃の機能を調べて、気逆をおろし嘔吐を止める、

(陳皮、朮)：脾胃を補益して気の働きを調える、

(陳皮、半夏)：胃気不和によって生じる胃部脹満、悪心嘔吐に多く用いられ、また湿痰が滞って起さる痰の多い咳嗽、胸悶を治療する

(半夏、茯苓)：痰を除去して止嘔する、

(人参、朮)：健脾益氣の効能、脾胃の虚弱による食欲不振、胸悶して起さる腹脹、吐瀉、脱力感などの症状を治療する、

(人参、茯苓)：心脾の気の不足、心臓動悸による気短、食欲不振、脱力感などの症状を治療する、

(人参、甘草)：補気生津、健脾養心作用があらわれるので、気虚の脾弱による食欲不振、脱力感、泥状便などの症状に常用される

<<方意分解>>

四君子湯＋陳皮、半夏

二陳湯＋人参、白朮、大棗

四君子湯＋二陳湯

<<古典>>

「万病回春」類中風、嘔吐、補益、癰疽の項に掲載されている。

	六君子湯	四君子湯	異功散
	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜、陳皮、半夏	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜、陳皮
補益	脾胃虚弱、飲食思うこと少なく、或いは久しくギャク痢を患い、もしくは内熱を覚え、或は飲食化し難く、酸を作し、虚火に属するを治す	脾胃虚弱、飲食思うこと少なく、或は、大便実せず、身体瘦せ、面黄ばみ、或は胸膈虚ひし、痰飲、吞酸し、あるいは脾胃虚弱、このんでギャク痢を患うる等の症を治す	
瘍疽	脾胃虚弱、或は寒涼こくばつし、腫痛して消せず、或は潰斂せざるを治す	脾胃虚弱、或はこくばつによって腫痛散ぜず、潰斂すること能わざるを治す、およそ気血俱に虚するの症	
類中風	香附子、木香、縮砂、食けつは飲食を過し、胃の気自ら傷りて運化すること能わず。故に昏冒す	火に中る者は、河間がいわゆる肝木の風。内胃に中り六経の邪外を侵す。まことに五志過極、火盛んに水衰うるによる。熱気ふつうつし、昏冒して卒にたおる	
嘔吐	当帰、かっこう、縮砂、山薬、蓮肉、烏梅、しょう米 久病、胃虚し、嘔吐するを治す		
喘急		陳皮、厚朴、縮砂、蘇子、桑皮、当帰、沈香、木香	
眩暈		陳皮、半夏、当帰、川きゅう、白し、天麻、桔梗、黄耆	
諸気		当帰、厚朴、縮砂	
痘瘡			当帰、川きゅう、かし、半夏、大附子、厚朴、肉桂、小丁香
麻疹		○	

<<古典>>

六君子湯

「医方口訣集」（長沢道寿）気虚して痰ある者、脾胃衰弱して湿有る者之を主る

「牛山方考」（香月牛山）脾胃虚弱にして痰飲を挟む者を治す

「勿誤方函口訣」（浅田宗伯）この方は理中湯の変方にして、中気を扶け、胃を開くの効あり。故に老人脾胃虚弱にして痰あり、飲食を思わず、或いは大病後脾胃虚し、食味なき者に用ゆ。陳皮、半夏、胸中胃口の停飲を推し開くこと一層力ありて、四君子湯に比すれば最も活用有り。千金方半夏湯の類数方あれども、このほうの平穩なるにしかず。

「方意弁義」（岡本一抱）この方の名も四君子湯の方名と同じ、六味合して不偏不倚にして君子中和の徳の如しと称して名付くるなり。本方は、脾胃を補い、元気を養う。四君子湯の条下にもこの方にも共に元気を養うと云へり。その元気の虚と云へる、軽重を論ずれば、四君子湯の虚より重しとす。湿は虚の強きに従ひてあつまるが故なり。湿を去り、痰を退く。湿痰を退き去るべきために陳皮、半夏を組み入れたり。半夏は湿痰を除去といへど、陳皮を入れざれば、湿を除く功なし。たとえばしめりたる土地をば、鋤鍬を以てすきかえして、しめりの燥くが如く、陳皮の辛味を以て、ひらきめぐらし、苦き味を以ておし下す。甘草を多く入れて宜しとす。されども多きこと過ぐれば、却って胸に泥む事あり。炮姜にすれば甘き味まさり、性の温なるところいよいよ甚し。このほうに限らず、凡て補剤に入る生姜は炮して用いて宜し。

「当莊庵家方口訣」（北尾春甫）気虚して湿痰あるに用いると云うが目付也。尾張那須心庵は六君子湯に附子、肉桂、乾姜を加えて、健脾湯と名付けて常の虚人の主方にしたり。予は常に中風の養生薬に用ゆる也。ギャク後には湿痰ある故に必ず用いる也。虚人のギャクに炮姜二匁程入れて、発する日の朝用いて解することもあり。惣じて人参剤を用ゆるに、甘きを好む人には能く応ずる也。攻撃剤を用いて却って不食するに、六君子湯に炮姜を加え、甘き味を得て、食進むもある也。腹痛もこの心得にて用ゆる也。

「経験筆記」（津田玄仙）六君子湯は皆知つての如く、甚だ使い道の多き方也。六君子湯は、四君子湯と二陳湯の合方にて、元気虚弱にして痰ある症に用いては正面の方也と知るべし。

「漢飲臆乗、脾胃門」（百々漢陰）此方今世間にて云う六君子湯なり。出所さだかならず、姑く得効方に拠る。主治いろは分の方函の主治と、此れに録したる の主治と合せ用ゆべし。畢竟脾胃虚弱、水湿を帯びるものを治す。予の治験と云いて別に単方を用ゆること少なし。大病人の死の極まりたるものなど、真武、四逆の類を用いて、なるほど症はいかにも的当なれども病人の元気至って虚し、附子の薬力に堪えず、薬煩するもの世にまあるものなり。そのときにはこの方を与ふれば元気も引きたて、さらにまた薬煩もせず、至ってらくになるものなり。また一つには此の方に附子を加えて小児の慢驚風に用いて経験ありしなり。その他は主治を見計らいろいろ加味して治套して用いるなり。類に触れて推し広むべし。

「腹症奇覽」（稲葉文礼）図のごとく、中カンより上、腹力ありて、下カン腹力なし、苓姜朮甘湯の腹症に似たり。臍下脱して力なく、小便不利、あるひは氣急促迫、その人氣短く、あるひはことにふれておどろく、或いは歩行してよく倒る、尤も小児にこの証多し、世に痼症と号するもの、この証間あり、その余某々の病、その憂を問わず、この腹に合するもの六君子湯を用いて治せざるものなし。学者用いて以て効を知るべし。

<<附方>>

香砂六君子湯：六君子湯に香附子、縮砂、かっこうを加える。六君子湯の症に更に宿食、痰気を兼ねたものを治す。一般に慢性胃腸虚弱者は、宿食と痰気を兼ねており、香砂六君子湯の証を表わすものが多い。

柴芍六君子湯：六君子湯証のようであって、心下に拘攣、ひこうを証明する場合に用いる。

四君子湯

「方意弁義」（岡本一抱）脾胃を補い、元気を養う、凡そ気虚の主方なり。右の四味中焦を補って、不偏不倚の徳を得て、君子中和の徳ありという意を以て四君子湯と名づく。医林集要にはこの方を華だが製方なりとする。四君子湯、六君子湯の分ちは、理の上にて論ずれば四君子湯は脾の薬、六君子湯は胃の薬と定む。しかれども薬を用ゆるときはこの論にはかまはぬこと也。全体を論ずるときは、四君子湯の補は六君子湯の補よりはすぐれてつよし、
が医案に軽きときは益気湯、重きときは四君子湯と云へり。四君子湯はひたすら中焦にて補いたもつ功ありとみえてこの如く云へるなり。一切の気虚を補うには四君子湯を以て主方とす。凡そ気虚と云うには肺気の虚、肝気の虚、心気の虚と云う類ありて、気虚には段々差別あり、しかれども薬を用ゆる時は四君子湯を以て一切気虚の主方とす。一切の気虚は本脾胃の気虚より起こるによって、四君子湯を以て気虚の主方とするなり

「勿誤方函口訣」（浅田宗伯）このほうは気虚を主とす、故に一切の脾胃の元気虚して諸症を見ず者、このほうに加減斟酌して療すべし。気虚を益すといえども、参附と組み合わせ用いる証とは余程相違あり、唯胃口に飲を蓄える故、胃中の陽気分布し難く、飲食これによって進まず、胃口日々に塞がり、胸膈虚ヒ、痰嗽呑酸などを発するなり。此の方及び六君子湯皆飲食進み難く、気力薄きを以て主症とす。故に脈腹もまたコレに準じて力薄く、小柴胡、瀉心湯などの脈腹とは違いあるものなり。

「当莊庵家方口解」（北尾春甫）まず四君子湯の脈は、洪大にして無力、あるいは虚細微、あるいは弦緊これを案じて鼓せず、或いは数にして力なし。心下弱し。脾胃を補う薬、此外には無しと知るべし、外の薬方は多味なる故に功薄し。胃気を補う最上の方なり。すべて脾胃の陽気を補う故に食進み出て、力出来る也。

「蕉窓方意解」（和田東郭）この方脾胃虚弱、飲食進み難きを第一の標的として用ゆべし。かくのごとく脾胃虚弱とはいへども、参附を組み合わせ用ゆべき症とはよほど相違あり、唯胃口に飲を蓄ふるゆへ、胃中の陽気分布しがたく、飲食これによって進み難く、胃陽日々に布し難く、胃口日々に塞がり、胸膈虚ヒ、痰嗽呑酸などの証あるなり。（中略）中気薄き病症ゆへ、心下ひこうして任脈通り結びゆる腹候なれども、軽々に腹表を摩すれば、腹皮何となく力薄く、ブワブワとしたるようにならぬ、この任脈および腹表の候ひに深く意を用いて錯認すべからず。

「名医方考」（呉 ）面色萎白、言語軽微、四肢無力、脈来ること虚弱なるもの此の方之を主る。それ面色萎白はすなわち之を望んで、しかして、その気虚なるを知り、言語軽微なるときはすなわち、之を切して、その気虚なるを知る。このごとくなるときはすなわち、宜しく気を補ふべし。

「療治茶談」（津田玄仙）四君子湯を用ゆるに大事の口訣一つあり、唇の色血色少なき時は四君子湯正面の証なりと知るべし。但し是は痔や下血の病人を見るときは口訣なり。補中益気湯は手足倦怠の一つを目的にとり、四君子湯は面色の萎黄と唇の色の血色少なきとの二つを目的にとりて用ゆ。これ益気湯と四君子のわかれなり。名医方考にいわく、上下出血太多しければ、必ず四物湯を与ふることなかれ、と。四君子湯は春と夏とのごとし、四物湯は秋と冬とのごとし。天地の間にて万物を生ずるは春と夏なり。又万物を枯らすとは秋と冬なり。これ天地陰陽の常道なり。諸出血の証、唇の色を見て萎白ならば宜しく四君子湯を用ゆべし。

<<大家の治験例>>

大塚敬節：便秘、食欲不振、めまいを訴える胃下垂症の患者。

28歳の婦人、一男一女がある。いままで著患を知らないが、平素から胃腸が弱い。最近、目立ってやせてきたので、医師にみてもらったところ、胃下垂症で、胃が骨盤まで下っているといわれた。そのためか、食欲が少なく、少し食べると、みずおちが重く、ときどきめまいがする。それに便秘するから4日に一回ぐらい浣腸をしているという。レ線による検診では、やせてはいるが、胸部には異常を発見しない。脈をみると、小弱で、臍上では振水音を証明する。私はこれに六君子湯を与え、甘味を好むので、それを制限するよう約束した。これを飲むと、毎日、気持ちの良い通事があり、食が進むようになり、1ヶ月ほどで4キロほど体重が増え、振水音もかすかに証明できる程度になった。そればかりか、風邪もひかなくなった。(漢方診療30年)

矢数道明：49歳の婦人であるが、2年前より胃下垂といわれ、いつも心窩部がひえ、全身倦怠感を訴え、肩や背が凝り、血圧は低く、ときどきめまいがして元気がない。この2年来皮膚に血豆がたくさん出てきた。便通は一回あるが、食欲がなく、子どもは一人で、帝王切開術をうけて生んだ。やせて貧血気味で、脈も腹も軟弱である。胃部拍水音が著名である。右季肋下部にやや緊張するところがあって、圧迫すると苦しいという。私はこれに柴芍六君子湯を与えた。これを服用していると、食欲が出て、冷えなくなり、冬になっても例年のように寒さを覚えず、コタツがいらなくなった。そればかりでない。不思議なことには、全身とくに腹部皮膚に赤小豆のように多発していた血豆が消えてきた。新しいのができなくなったといって、大喜びであった。4カ月ほど飲んで廃棄した。(漢方処方解説)

花輪壽彦：33歳、女性。主訴は十二指腸潰瘍と背中のこりの治療。舌は薄い白苔、腹診では心下ひこう(+)、腹直筋攣急(+)、胃内停水(2+)、腹部動悸(+)、小腹不仁(+)。六君子湯にて十二指腸潰瘍の再発はなく、背中のこりも軽減した。現在は六君子湯合香蘇散料を内服中である。

漢方診療のレッスン357ページ、喘息患者。喘息発作の誘因に、1風邪をひくと発作に移行、2食べ過ぎたりしておなかの具合が悪いとき、3天候の変わり目にわるくなる、3低気圧が接近すると便意を催し軟便がでる、4発作の前におなかが張ってくる、脈：沈、弱、舌：湿、白苔、腹：軽度の心窩ひこう、臍部動悸、六君子湯を処方し、2週間で胃腸の具合がよくなり、徐々に喘息発作の頻度、程度が軽くなっていった。

津田玄仙：△男子鼓腸を患う、面色萎黄、手足倦怠、咳嗽有りて痰ぜん出ること余程なり。脈も亦微弱なり。六君子湯に厚朴、枳実を加え、大半は快し、然れども十分の効なし。さらに乾姜を加え60服にして大いに快し、のち前方ばかりを用いること半年ばかりにして全快したり。面色萎黄、脈微弱、手足のだるきはこれ脾胃の虚なり。咳嗽痰ぜんは痰なり。故に六君子湯を用いたり。△一人胸つかえて力なく嘔吐あり、皆痰ぜんを吐く、少し手足倦怠の気味あり、百日ばかり服薬験なし。治を予に求む。予脈をみるに浮きて眩数なるに似たれども推して力なき様なり。六君子湯に枳実を加え服薬30余日をへて全快す。これ手足の倦怠は脾胃の虚なり、四君子の症なり。胸、かたくつかえるは枳実の症なり。ときに嘔して痰を吐すは湿痰の逆なればこれ二陳湯の症なり。ゆえに六君子湯に枳実を加う。△一産婦子を持ちてのち、にわか悪心嘔吐し、いかようにしても治せず、予六君子湯に炮姜、木香、丁子を少し加えて与う。服薬1度にして嘔すなくなり、一服をのみきらぬにさっぱりと治したり。これらは全く脾胃虚の痰嘔なり。

(経験筆記)

<<現代薬理、研究>>

1 消化器系の研究が多い。(別紙参照)

2 The effects of Rikkunshi-to on Parkinsonian patients with unstable effect of levodopa/carbidopa

Yutaka Hiyama et al. 和漢薬学会雑誌8、83-88、1991

3 六君子湯、補中益気湯の自律神経、下垂体-副腎機能に及ぼす影響に関する検討

岡 孝和ら、和漢薬学会誌8、360-361、1991

4 慢性腎炎にともなう口苦に対する六君子湯の有用性

元雄良治ら、漢方医学19巻の3、87-89、1995

Handwritten notes in red ink: Parkinson 脊髄小脳変性症, 自律神経状態 延髄 中脳 L-DOPAの吸収が一途する, 六君子湯 アセナリン プリンペラジン

六君子湯

「明」の時代に成立した「万病回春」の処方

<<効能>>

日本医師会医薬品カードより

構成生薬：蒼朮、人参、半夏、茯苓、大棗、陳皮、甘草、生姜

使用目標：本方は、主として慢性化した胃腸機能の低下症状に用いる処方である。本方を使う目標は心窩部の膨満感、食欲不振、全身の倦怠感などである。便通は便秘のことも、軟便のこともある。腹部は軟弱無力で、心窩部や臍の近傍に振水音を認めることが多い。

鑑別を要する処方：四君子湯、人参湯、茯苓飲、半夏瀉心湯

適応症：上記使用目標にしたがって、次の諸疾患に適用される。

胃炎、胃アトニー、胃下垂、慢性胃腸炎、胃潰瘍、慢性消耗性疾患あるいは術後の胃腸障害。

<<構成生薬>>

人参 4g、白朮 4g、大棗 2g、甘草 1g、茯苓 4g、生姜 0.5g、陳皮 2g、半夏 4g

人参：大補元氣、安神益智、健脾益氣、生津

白朮：補脾益氣、燥湿利水

大棗：補脾胃、養營安神、緩和薬性

甘草：補脾益氣、清熱解毒、潤肺止咳

茯苓：利水滲湿、健脾和中、寧心安神

生姜：発汗解表、温中止嘔、解毒

陳皮：理氣健脾、燥湿化痰

半夏：降逆止嘔、燥湿化痰、消~~と~~散結

<<二味の薬徴>>

補氣、補益

(生姜、大棗)：脾胃の機能を補養し、営衛を整える、

(生姜、半夏)：種々の原因で引き起こされた嘔吐、脾胃の機能不調でとどこおった湿、痰のよるひ満や咳嗽や多痰などの症状に用いる、

(茯苓、朮)：健脾利湿の効能が現れ、脾虚による運化機能の停滞、痰飲の停滞、ひ満による吐瀉及び脾虚の水腫に用いられる

(陳皮、生姜)：脾胃の機能を調べて、氣逆をおろし嘔吐を止める、

(陳皮、朮)：脾胃を補益して氣の働きを調える、

(陳皮、半夏)：胃氣不和によって生じる胃部脹満、悪心嘔吐に多く用いられ、また湿痰が滞って起さる痰の多い咳嗽、胸悶を治療する

(半夏、茯苓)：痰を除去して止嘔する、

(人参、朮)：健脾益氣の効能、脾胃の虚弱による食欲不振、胸悶して起さる腹脹、吐瀉、脱力感などの症状を治療する、

(人参、茯苓)：心脾の氣の不足、心臓動悸による氣短、食欲不振、脱力感などの症状を治療する、

(人参、甘草)：補氣生津、健脾養心作用があらわれるので、氣虚の脾弱による食欲不振、脱力感、泥状便などの症状に常用される

<<方意分解>>

四君子湯＋陳皮、半夏

二陳湯＋人参、白朮、大棗

四君子湯＋二陳湯

<<古典>>

「万病回春」類中風、嘔吐、補益、癰疽の項に掲載されている。

	六君子湯	四君子湯	異功散
	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜、陳皮、半夏	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜 <i>肺ありは</i>	茯苓、人參、白朮、甘草、大棗、生姜 陳皮
補益	脾胃虚弱、飲食思ふこと少なく、或いは久しくギャク痢を患い、もしくは内熱を覚え、或は飲食化し難く、酸を作し、虚火に属するを治す	脾胃虚弱、飲食思ふこと少なく、或は、大便実せず、身体瘦せ、面黄ばみ、或は胸膈虚ひし、痰飲、吞酸し、あるいは脾胃虚弱、このんでギャク痢を患うる等の症を治す	
癰疽	脾胃虚弱、或は寒涼こくばつし、腫痛して消せず、或は潰斂せざるを治す	脾胃虚弱、或はこくばつによって腫痛散せず、潰斂すること能わざるを治す、およそ気血俱に虚するの症	
類中風	香附子、木香、縮砂食けつは飲食を過し、胃の気自ら傷りて運化すること能わず。故に昏冒す	火に中る者は、河間がいわゆる肝木の風。内胃に中り六経の邪外を侵す。まことに五志過極、火盛んに水衰うるによる。熱気ふつうつし、昏冒して卒にたおる	
嘔吐	当帰、かっこう、縮砂、山薬、蓮肉、烏梅、しょう米 <i>東</i> 久病、胃虚し、嘔吐するを治す		
喘急		陳皮、厚朴、縮砂、蘇子、桑皮、当帰、沈香、木香	
眩暈		陳皮、半夏、当帰、川きゅう、白し、天麻、桔梗、黄耆	
諸気		当帰、厚朴、縮砂	
痘瘡			当帰、川きゅう、かし、半夏、大附子、厚朴、肉桂、小丁香
麻疹		○	

<<古典>>

六君子湯

「医方口訣集」(長沢道寿) 気虚して痰ある者、脾胃衰弱して湿有る者之を主る

「牛山方考」(香月牛山) 脾胃虚弱にして痰飲を挟む者を治す

「勿誤方函口訣」(浅田宗伯) この方は理中湯の変方にして、中気を扶け、胃を開くの効あり。故に老人脾胃虚弱にして痰あり、飲食を思わず、或いは大病後脾胃虚し、食味なき者に用ゆ。陳皮、半夏、胸中胃口の停飲を推し開くこと一層力ありて、四君子湯に比すれば最も活用有り。千金方半夏湯の類数方あれども、このほうの平穩なるにしかず。

「方意弁義」(岡本一抱) この方の名も四君子湯の方名と同じ、六味合して不偏不倚にして君子中和の徳の如しと称して名付くるなり。本方は、脾胃を補い、元気を養う。四君子湯の条下にもこの方にも共に元気を養うと云へり。その元気の虚と云へる、輕重を論ずれば、四君子湯の虚より重しとす。湿は虚の強きに従ひてあつまるが故なり。湿を去り、痰を退く。湿痰を退き去るべきために陳皮、半夏を組み入れたり。半夏は湿痰を除去といへど、陳皮を入れざれば、湿を除く功なし。たとえばしめりたる土地をば、鋤鍬を以てすきかえして、しめりの燥くが如く、陳皮の辛味を以て、ひらきめぐらし、苦き味を以ておし下す。甘草を多く入れて宜しとす。されども多きこと過ぐれば、却って胸に泥む事あり。炮姜にすれば甘き味まさり、性の温なるところいよいよ甚し。このほうに限らず、凡て補剤に入る生姜は炮して用いて宜し。

「当莊庵家方口解」(北尾春甫) 気虚して湿痰あるに用いると云うが目付也。尾張那須心庵は六君子湯に附子、肉桂、乾姜を加えて、健脾湯と名付けて常の虚人の主方にしたり。予は常に中風の養生薬に用ゆる也。ギャク後には湿痰ある故に必ず用いる也。虚人のギャクに炮姜二匁程入れて、発する日の朝用いて解することもあり。惣じて人参剤を用ゆるに、甘きを好む人には能く応ずる也。攻撃剤を用いて却って不食するに、六君子湯に炮姜を加え、甘き味を得て、食進むもある也。腹痛もこの心得にて用ゆる也。

「経験筆記」(津田玄仙) 六君子湯は皆知つての如く、甚だ使い道の多き方也。六君子湯は、四君子湯と二陳湯の合方にて、元気虚弱にして痰ある症に用いては正面の方也と知るべし。

「漢飲臆乗、脾胃門」(百々漢陰) 此方今世間にて云う六君子湯なり。出所さだかならず、姑く得効方に拠る。主治いろは分の方函の主治と、此れに録したる**薛也**の主治と合せ用ゆべし。畢竟脾胃虚弱、水湿を帯びるものを治す。予の治験と云いて別に単方を用ゆること少なし。大病人の死の極まりたるものなど、真武、四逆の類を用いて、なるほど症はいかにも的当なれども病人の元氣至って虚し、附子の薬力に堪えず、薬煩するもの世にまもあるものなり。そのときにはこの方を与ふれば元氣も引きたて、さらにまた薬煩もせず、至ってらくになるものなり。また一つには此の方に附子を加えて小児の慢驚風に用いて経験ありしなり。その他は主治を見計らいろいろ加味して治套して用いるなり。類に触れて推し広むべし。

「腹症奇覽」(稻葉文礼) 図のごとく、中カンより上、腹力ありて、下カン腹力なし、苓姜朮甘湯の腹症に似たり。臍下脱して力なく、小便不利、あるひは氣急促迫、その人氣短く、あるひはことにふれておどろく、或いは歩行してよく倒る、尤も小児にこの証多し、世に癩症と号するもの、この証間あり、その余某々の病、その憂を問わず、この腹に合するもの六君子湯を用いて治せざるものなし。学者用いて以て効を知るべし。

<<附方>> **互明**

香砂六君子湯：六君子湯に香附子、縮砂、かっこうを加える。六君子湯の症に更に宿食、痰気を兼ねたものを治す。一般に慢性胃腸虚弱者は、宿食と痰気を兼ねており、香砂六君子湯の証を表わすものが多い。

柴芍六君子湯：六君子湯証のようであつて、心下に拘攣、ひこうを証明する場合に用いる。

四君子湯

「方意弁義」(岡本一抱)脾胃を補い、元気を養う、凡そ気虚の主方なり。右の四味中焦を補って、不偏不倚の徳を得て、君子中和の徳ありという意を以て四君子湯と名づく。医林集要にはこの方を華だが製方なりとする。四君子湯、六君子湯の分ちは、理の上にて論ずれば四君子湯は脾の薬、六君子湯は胃の薬と定む。しかれども薬を用ゆるときはこの論にはかまはぬこと也。全体を論ずるときは、四君子湯の補は六君子湯の補よりはすぐれてつよし、詳代が医案に軽きときは益気湯、重きときは四君子湯と云へり。四君子湯はひたすら中焦にて補いたもつ功ありとみえてこの如く云へるなり。一切の気虚を補うには四君子湯を以て主方とす。凡そ気虚と云うには肺気の虚、肝気の虚、心気の虚と云う類ありて、気虚には段々差別あり、しかれども薬を用ゆる時は四君子湯を以て一切気虚の主方とす。一切の気虚は本脾胃の気虚より起こるによって、四君子湯を以て気虚の主方とするなり

「勿誤方函口訣」(浅田宗伯)このほうは気虚を主とす、故に一切の脾胃の元気虚して諸症を見す者、このほうに加減斟酌して療すべし。気虚を益すといえども、参附と組み合わせ用いる証とは余程相違あり、唯胃口に飲を蓄える故、胃中の陽気分布し難く、飲食これによって進まず、胃口日々に塞がり、胸膈虚と、痰嗽吞酸などを発するなり。此の方及び六君子湯皆飲食進み難く、気力薄きを以て主症とす。故に脈腹もまたコレに準じて力薄く、小柴胡、瀉心湯などの脈腹とは違いあるものなり。

「当莊庵家方口解」(北尾春甫)まず四君子湯の脈は、洪大にして無力、あるいは虚細微、あるいは弦緊これを案じて鼓せず、或いは数にして力なし。心下弱し。脾胃を補う薬、此外には無しと知るべし、外の薬方は多味なる故に功薄し。胃気を補う最上の方なり。すべて脾胃の陽気を補う故に食進み出て、力出来る也。

「蕉窓方意解」(和田東郭)この方脾胃虚弱、飲食進み難きを第一の標的として用ゆべし。かくのごとく脾胃虚弱とはいへども、参附を組み合わせ用ゆべき症とはよほど相違あり、唯胃口に飲を蓄ふるゆへ、胃中の陽気分布しがたく、飲食これによって進み難く、胃陽日々に布し難く、胃口日々に塞がり、胸膈虚ひ、痰嗽吞酸などの証あるなり。(中略)中気薄き病症ゆへ、心下ひこうして任脈通り結びゆる腹候なれども、軽々に腹表を摩すれば、腹皮何となく力薄く、ブワブワとしたるようにならぬ、この任脈および腹表の候ひに深く意を用いて錯認すべからず。

「名医方考」面色萎白、言語軽微、四肢無力、脈来ること虚弱なるもの此の方之を主る。それ面色萎白はすなわち之を望んで、しかして、その気虚なるを知り、言語軽微なるときはすなわち、之を切して、その気虚なるを知る。このごとくなるときはすなわち、宜しく気を補ふべし。

「療治茶談」(津田玄仙)四君子湯を用ゆるに大事の口訣一つあり、唇の色血色少なき時は四君子湯正面の証なりと知るべし。但し是は痔や下血の病人を見るとき口の証なり。補中益気湯は手足倦怠の一つを目的にとり、四君子湯は面色の萎黄と唇の色の血色少なきとの二つを目的にとりて用ゆ。これ益気湯と四君子のわかれなり。名医方考にいわく、上下出血太多しければ、必ず四物湯を与ふることなかれ、と。四君子湯は春と夏とのごとし、四物湯は秋と冬とのごとし。天地の間にて万物を生ずるは春と夏なり。又万物を枯らすとは秋と冬なり。これ天地陰陽の常道なり。諸出血の証、唇の色を見て萎白ならば宜しく四君子湯を用ゆべし。

い。

六君子湯はオープントライアルながら多施設比較臨床試験で効果が確認されている。多くの場合、一般的な慢性胃炎に応用される西洋薬を対照においているが、六君子湯はいずれの場合も同等、もしくはそれ以上の効果が認められている。さらに、高齢者の慢性胃炎について層別解析するとより効果が高いことが明らかとなり、伝統的な六君子湯の臨床応用の妥当性が証明されつつある。食欲不振、胃潰瘍などの消化管の病態は消化管の粘膜の異常だけでなく、常により全身的に心と体の両面からとらえて治療する必要がある。六君子湯はまさにこの目的に合致している治療薬といえよう。

文献

- 1) 三好秋馬, 谷内昭, 正宗研, 他: 慢性胃炎などの不定の消化器愁訴に対するTJ-43ツムラ六君子湯の臨床評価. Prog Med, 11: 1605~1631, 1991
- 2) 三好秋馬, 金子榮蔵, 中澤三郎, 他: 胃炎(急性胃炎および慢性胃炎の急性増悪期)に対するTJ-43ツムラ六君子湯の臨床評価. 診断と治療, 79: 789~810, 1991
- 3) 坂上博, 太田康幸: 胃炎(急性胃炎および慢性胃炎の急性増悪)に対する医療用漢方製剤の多施設臨床評価. 消化器科, 12: 183~189, 1990
- 4) 竹本忠良, 松田和也, 多田正弘, 他: 上腹部愁訴を有する胃炎に対するTJ-43ツムラ六君子湯の臨床的有用性の検討. 消化器科, 12: 223~234, 1990
- 5) 功刀正史, 関口利和, 長嶺竹明, 他: 上腹部不定愁訴患者に対するTJ-43ツムラ六君子湯の使用経験. 診療と新薬, 27: 2099~2105, 1990
- 6) 河村奨, 有山重美, 田辺満彦, 他: 上腹部不定愁訴に対するツムラ六君子湯の臨床的検討(第2報). 漢方医学, 14: 14~20, 1990
- 7) 河村奨, 沖田極, 多田正弘, 他: 上腹部不定愁訴に対するツムラ六君子湯とsulpirideとの臨床的比較検討. Prog Med, 12: 1156~1162, 1992
- 8) 浜本哲郎, 門原三志男, 吉村禎二, 他: 上腹部不定愁訴に対するTJ-43ツムラ六君子湯の多施設臨床評価. 臨床と研究, 71: 1888~1894, 1994
- 9) 佐藤純一, 島仁, 浅木茂, 他: 慢性胃炎に伴う上腹部不定愁訴に対するTJ-43ツムラ六君子湯の多施設臨床評価. Prog Med, 11: 1633~1645, 1991
- 10) 田中政彦, 秋山雄次, 大野修嗣, 他: 消炎鎮痛剤使用下消化器症状に対する六君子湯の有用性について. 日東洋医誌, 44: 1~6, 1993
- 11) 岡孝和, 美根和典, 中川哲也: 上腹部不定愁訴を有する慢性胃炎患者に対する六君子湯の効果. Prog Med, 11: 461~468, 1991
- 12) 岡孝和, 村岡衛, 金沢文高, 他: 上腹部不定愁訴に対するTJ-43ツムラ六君子湯の臨床評価. 心身医療, 4: 227~233, 1992
- 13) 岡孝和, 粉川皓伸, 中川哲也: 上腹部不定愁訴患者に対する六君子湯の使用経験. 漢方診療, 9(3): 18~22, 1990
- 14) 浅見隆康, 宮永和夫, 井田逸朗, 他: 精神科領域におけるツムラ六君子湯の治療経験. 薬理と治療, 20: 3851~3857, 1992
- 15) 浅見隆康, 宮永和夫, 井田逸朗, 他: 精神科領域におけるツムラ六君子湯の治療経験. 新薬と臨床, 42: 75~80, 1993
- 16) 元雄良治, 渡辺弘之, 岡井高, 他: 慢性胃炎に伴う口苦に対する六君子湯の有用性. 漢方医学, 19: 87~89, 1995
- 17) 元雄良治, 澤武紀雄: 慢性胃炎にともなう口苦に対する六君子湯の有用性. 現代医療学, 10: 79~82, 1995
- 18) 松林直, 瀧井正人, 野崎剛弘, 他: 神経性食欲不振症の治療初期段階での六君子湯の使用経験. 心身医学, 35: 519~524, 1995
- 19) 橋本邦夫, 杉山貢, 国崎主税: 胃切除後逆流性食道炎と六君子湯. 医学のあゆみ, 167: 728~730, 1993
- 20) 橋本邦夫, 杉山貢, 国崎主税: 胃切除後逆流性食道炎に対する六君子湯の効果. Prog Med, 14: 2244~2246, 1994
- 21) 伊藤良正, 阿保七三郎, 北村道彦, 他: 食道癌術後患者に対するツムラ六君子湯(TJ-43)の使用経験. Prog Med, 13: 1114~1118, 1993
- 22) 井齊偉矢, 森川利昭, 近藤正道, 他: 胸部および腹部術後消化器症状に対するツムラ六君子湯(TJ-43)の使用経験. Prog Med, 13: 1111~1113, 1993
- 23) 合地明, 広瀬周平, 佐藤克明, 他: 胃切除術後の消化器症状に対する半夏瀉心湯, 六君子湯の効果. 口消外会誌, 28: 961~965, 1995
- 24) 山本佳洋, 桜林真, 瀬在秀一, 他: 食道酸逆流と胃食道逆流症状との関係. 診断と治療, 82: 697~701, 1994
- 25) 山本佳洋, 桜林真, 瀬在秀一, 他: 非典型的胃食道逆流症状に対するツムラTJ-43六君子湯の効果. 診断と治療, 83: 2229~2233, 1995
- 26) 大萱稔: 慢性関節リウマチの貧血と漢方薬の使用経験. Pharma medica, 増刊号: 218~223, 1986
- 27) 町村英郎, 伊従茂, 谷亀光則, 他: 強い嘔気・嘔吐を有さない糖尿病患者の胃排出能に及ぼす六君子湯の影響. 漢方医学, 18: 91~94, 1994
- 28) 後藤順子, 早坂篤, 結城道広, 他: プロモクリプチンの副作用に対するTJ-43の効果. 産婦人科漢方研究のあゆみ, 10: 57~62, 1993
- 29) 柴田昌典, 坂口俊樹, 内山秀男, 他: 維持透析患者の高カリウム血症の漢方製剤六君子湯によるコントロール. 透析会誌, 28: 1443~1446, 1995
- 30) 浮田徹也: 満期産低出生体重児に対するツムラ六君子湯使用経験. 漢方医学, 13: 90~93, 1989
- 31) 岸田猛, 丸尾匡宏, 岩里征宙, 他: “六君子湯TJ-43+附子”が効果を奏したITP症例を積み重ねて. 和漢医

- 薬誌, 7: 470-471, 1990
- 32) 蟹谷昌尚, 峰松澄穂, 前村俊一: ツムラ六君子湯(TJ-43)のラットを用いた単回および13週間反復経口投与毒性試験ならびに4週間回復性試験. 薬理と治療, 23: 1911-1926, 1995
- 33) Hasegawa T, Yamaki K, Nadai M: Lack of effect of Chinese medicines on bioavailability of ofloxacin in healthy volunteers. *Int J Clin Pharmacol Therap*, 32: 57-61, 1994
- 34) Hasegawa T, Yamaki K, Muraoka I, et al.: Effects of traditional Chinese medicines on pharmacokinetics of revofloxacin. *Antimicrob Agents Chemother*, 39: 2135-2137, 1995
- 35) 坂上博, 細川鎮史, 山下省吾, 他: 六君子湯の胃粘膜防御因子増強作用について. *Prog Med*, 11: 497-501, 1991
- 36) 佐久間裕之, 小池一成, 荒川哲男, 他: 六君子湯および四逆散のサイトプロテクション作用に関する検討. *Prog Med*, 12: 1139-1143, 1992
- 37) 荒川哲男, 小池一成, 福田隆, 他: TJ-43六君子湯によるサイトプロテクション作用の機序に関する検討. *Prog Med*, 13: 2827-2831, 1993
- 38) 小野耕一, 斎藤栄一, 佐伯哲久, 他: 漢方製剤の酸分泌抑制作用に関する実験的検討. *Prog Med*, 13: 2832-2835, 1993
- 39) 緒方優美, 石原和彦, 小室裕一, 他: ラットエタノール潰瘍に伴う胃粘液量変動に対する六君子湯の効果. 診断と治療, 80: 1257-1261, 1992
- 40) Ogata Y, Goso Y, Ishihara K, et al.: Mucosal protection by shokyo, a crude drug, against ethanol-induced gastric damage in rat. *Kitasato Med*, 24: 381-389, 1994
- 41) 榎村博正, 中原朗, 福富久之: 胃炎に対する六君子湯の効果とその胃粘液血流に与える影響. *Prog Med*, 12: 1147-1152, 1992
- 42) 榎村博正, 中原朗, 福富久之: 六君子湯のヒト胃粘膜血行動態に与える影響. *Prog Med*, 11: 469-475, 1991
- 43) 榎村博正, 中原朗, 福富久之: 消化性潰瘍と漢方治療. *医学のあゆみ*, 167: 741-744, 1993
- 44) 榎村博正, 中原朗, 福富久之: 消化性潰瘍に対する漢方治療の臨床的效果. *Prog Med*, 15: 143-147, 1995
- 45) 村国均, 小澤哲郎, 清宮清治, 他: 消化管の空腹期強収縮運動に及ぼす六君子湯の影響. *日東洋医誌*, 43: 255-262, 1992
- 46) 原澤茂, 長谷部哲理, 三輪剛, 他: 漢方製剤の胃排出機能, および胃粘膜血流に及ぼす影響. *Prog Med*, 13: 2836-2841, 1993
- 47) 原澤茂, 三輪剛: TJ-43ツムラ六君子湯の胃排出能に及ぼす影響と臨床治療効果についての検討. *消化器科*, 12: 215-222, 1990
- 48) 原澤茂, 長谷部哲理: 漢方薬の胃機能改善作用. *医学のあゆみ*, 167: 731-734, 1993
- 49) 原澤茂: 漢方製剤の胃機能に及ぼす効果. *現代医療学*, 10: 232-238, 1995
- 50) 須山哲次, 鍛冶山英俊, 三好秋馬: 六君子湯の胃排出能に及ぼす効果. *Prog Med*, 11: 507-513, 1991
- 51) 須山哲次, 徳林史代: 胃炎・上腹部不定愁訴(NUD)の漢方治療. *医学のあゆみ*, 167: 735-740, 1993
- 52) 川合満, 加藤元一, 村上元庸, 他: TDI感作モルモット喘息における胃粘膜血流に対する漢方薬TJ-43(六君子湯)の効果. *漢方と免疫・アレルギー*, 6: 10-17, 1992
- 53) 川合満, 加藤元一, 村上元庸, 他: TDI感作モルモット喘息における胃粘膜血流に対する漢方薬TJ-43(六君子湯)の効果. *Therapeutic Research*, 14: 2061-2069, 1993
- 54) 姫井猛, 内田耕三郎, 川西純暉: 糖尿病患者の胃症状に対する漢方薬(四逆散, 六君子湯)の効果: 胃電図による検討. *岡山赤十字医誌*, 3: 34-37, 1992
- 55) Himei H, Uchida K, Kawanishi Y: Effects of Chinese traditional medicine(Shigyaku-san, Rikkunshi-to) on gastric action potentials in patients with diabetes mellitus. *Elsevier Science Publishers B.V*, 1992, 261-265
- 56) 長谷部哲理, 原澤茂, 三輪剛: ツムラ六君子湯の胃排出能, ガストリン放出および胃粘膜血流に及ぼす影響. 21世紀を目指して羽ばたく消化器病学: 494-495, 1993
- 57) 佐藤弘, 森治樹: 漢方製剤の胃分泌に及ぼす影響について. *Pharma medica*, 増刊号: 87-92, 1988
- 58) 岡孝和, 小宮山博朗, 中川哲也, 他: 六君子湯, 補中益気湯の副腎皮質機能・自律神経機能に及ぼす影響の検討. *日東洋医誌*, 43: 439-446, 1993
- 59) 岡孝和, 美根和典, 中川哲也, 他: 消化器心身症. *和漢医薬誌*, 7: 242-245, 1990
- 60) 岡孝和, 小宮山博朗, 中川哲也, 他: 六君子湯, 補中益気湯の自律神経, 下垂体-副腎機能に及ぼす影響に関する検討. *和漢医薬会誌*, 8: 360-361, 1991
- 61) 安川憲, 劉素延, 滝戸道夫: 六君子湯の発癌抑制効果. *和漢医薬誌*, 11: 434-435, 1994
- 62) Yasukawa K, So Y Y, Kakinuma S, et al.: Inhibitory effect of Rikkunshi-To, a traditional Chinese herbal prescription, on tumor promotion in two-stage carcinogenesis in mouse skin. *Biol Pharm Bull*, 18: 730-733, 1995
- 63) 王誠明, 太田節子, 篠田雅人: 放射線障害防護薬剤に関する研究(第29報), 放射線皮膚障害に対する各種漢方方剤メタノールエキスの防護効果. *薬学雑誌*, 110: 218-224, 1990
- 64) 野田亨, 于向民, 劉友章, 他: 胃粘膜上皮におけるアドリアマイシン細胞傷害に対する六君子湯の投与効果. *漢方医学*, 18: 127-133, 1994
- 65) Xiang M Y, You Z L, Noda T, et al.: Chinese traditional medicine protects gastric parietal cells from adriamycin cytotoxicity. *Acta Histochem Cytochem*, 28: 539-547, 1995